

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名

愛知県

学校の概要（平成15年4月現在）

| | | | | | | |
|-----|-----------|-----|-----|------|-----|-----|
| 学校名 | 小牧市立応時中学校 | | | | | |
| 学年 | 1年 | 2年 | 3年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 5 | 4 | 5 | 1 | 15 | 32 |
| 生徒数 | 179 | 149 | 176 | 4 | 508 | |

研究の概要

1. 研究主題

確かな基盤を身につけ、課題に立ち向かう気概を持った生徒の育成

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

- ・ 全学年・全教科
- ・ 学力向上フロンティアスクールの指定を契機に、全ての教科指導について学力の定着と指導のあり方を見直すため、また、全ての教員が、自分の教科の問題として研究に取り組める体制をとることにより、全ての生徒にその成果を広めるため。

(2) 年次ごとの計画

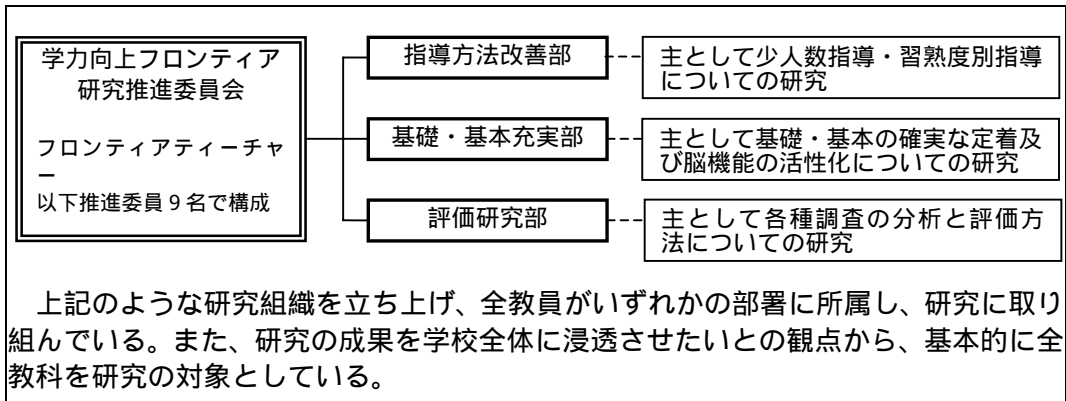
| | |
|--------|--|
| 平成14年度 | |
|--------|--|

| | |
|--------|---|
| 平成15年度 | <p>テーマ 学力向上にむけての基礎研究 研究の見通し 学力向上の基盤となる「脳機能の活性化」と「人間関係」を中心に基礎的な研究を進め、次年度に向けての土台作りを行うとともに、少人数指導及び習熟度別指導についての実践研究を行う。</p> <p>研究の内容・方法 東北大学川島隆太教授の「脳機能イメージング研究」の成果を参考にし、生徒の脳機能を高めるための、トレーニング方法について研究と実践を行う。「人間関係」については、南山大学人間関係研究センターと連携し、主として道徳の時間を利用して、「ラボラトリーメソッドによる体験学習」に取り組み、その考え方を授業に応用する基礎研究を行う。</p> <p>個に応じた指導を実現するため、少人数指導や習熟度別指導による実践研究を、主として、数学・英語・理科において行い、その効果的な導入方法を模索する。また、その成果を他教科に応用する方策を研究する。</p> |
|--------|---|

| | |
|--------|--|
| 平成16年度 | <p>テーマ 学力向上に向けての授業改善の具体化 研究の見通し 「脳機能活性化トレーニング法」の確立と授業への導入及び「ラボラトリーメソッドによる体験学習」の理論を基にした単元計画及び授業展開を確立することにより、学力向上に向けた指導のあり方を具体化していく。また、少人数指導・習熟度別指導に効果的な導入方法についても、その一つの柱として位置づけを明確にしていく。</p> <p>研究の内容・方法 「脳機能活性化トレーニング法」として、「音読」を授業に取り入れる際の留意事項をさらに明確にするとともに、「音読」以外の活性化方法についてさらに研究を深め、その教材化を図る。</p> <p>「ラボラトリーメソッドによる体験学習」の理論を教科指導の中に反映させるとともに、「体験学習」で用いられるエクササイズ形式に準じた授業形態を生み出し、その教材化を図っていく。</p> <p>少人数指導においては、条件の許す限り、その導入を促進していく。また、習熟度別指導については、「部分的習熟度別指導」を軸に「レディネス別指導」や「傾向別指導」についても、研究を深めていく。</p> |
|--------|--|

* 平成15年度からの新規校については、平成15、16年度の計画について記入すること。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

客観的な数値としては、1月に実施した目標基準準拠テスト(CRT)及び4月に実施予定の集団基準準拠テスト(NRT)の結果と分析を待たなくてはならないが、研究初年度として、その足場固めができたと考える。例えば、「音読」の導入効果については、客観性にやや疑問はあるものの、以下のような向上例がある。

音読導入前後の社会科定期テスト「知識・理解」の通過率の比較

| 時 期 | 音読導入前 | | 音読導入後 | |
|----------|-------|-------|-------|-------|
| | 1学期中間 | 1学期期末 | 2学期中間 | 2学期期末 |
| テ ス ト 名 | | | | |
| 平均通過率(%) | 54.3 | 64.5 | 67.6 | 71.7 |

また、「ラボラトリーメソッドによる体験学習」については、道徳の時間を利用して取り組んできたことで、全ての担任(一部副担任を含む)が実践を行うことで、その理論と実践に対する基礎的理解を行うことができた。また、全ての生徒が体験できたことで、次のステップへと進む土台作りができた。

